

◇卒業論文要旨（昭和50年3月卒業生）

相模原市の工業化と水利用の変化

石川文子

相模原市は、神奈川県央北部、東京から40 Km圏内に位置する。その中心部は、現在相模原台地と呼ばれる洪積世台地の上位段丘面上にあり、地下水が深く、井戸掘技術の未発達な時代は水が得にくいため、放置され入会野に利用されていた。（一部狭い地域では新田開発も行なわれたが）。明治には養蚕地帯となり、昭和初期（12年～20年）には、陸軍諸施設が入り込み軍都となった。その時に都市建設区画整理事業が施行され、それが後の工業化・都市化の基盤として先行投資的な役割を果たした。

昭和29年には市制施行し、それに伴い昭和30年に工業誘致条例を制定した。日本の高度経済成長と時期を一にしたため工業化が進展し、現在の内陸工業地帯を形成するに至った。

工場進出の際に水が得にくいという事がどの程度制約を与えたのかを、この論文で考察してみた。

工業化初期の頃は、井戸を深く掘りさえすれば豊富な水が得られた。井戸掘技術も発達したので、非用水型工業にとっては、それ程の支障はなく、それ以外の条件の魅力（安価な土地・交通の便等）に惹かれて進出してきたのである。そのことは、相模原市内という狭い範囲においても、工場の分布と地下水位との比較を行うと如実に示される。市内の工業の中心は北部にある。そこは交通の要衝ではあるが、地下水位の一番深い地域である。

しかし、現在は工業用水の多量汲み上げによる地下水の枯渇（自然地下水位低下5 m以上）と、人口増加による上水道の水不足と、用水の絶対量不足が将来予測できる段階を迎えた。したがって工場の立地条件における“用水”の比重は、以前より大きなものになったと考えることができる。

上尾市の都市化と農業

植野良子

上尾市は埼玉県東部の大宮台地上に位置し東京駅から35 Km、高崎線を利用すると約50分の距離である。この農業は元来主に地形などの自然条件によって支配され麦、甘藷などの畑作が主であった。水田は台地を侵食する小規模な谷にあった（谷津田）が、そこでは摘田が経営されていた。戦後上尾市農業は大きく転換するが、その主な原因の1つは都市化である。

上尾市が本格的に都市化するのには昭和30年代以降であるが、昭和30年代は工場誘致条例施行などの工業化政策の結果工業都市として、昭和40年代は多数の住宅団地が建設された結果住宅都市として都市機能が拡大した。